

仏教壮年の声



東日本大震災の復興支援活動を長期にわたり続ける会員。このボランティアがきっかけで仏壮が誕生した

「この活動で偶然、本山の仏壮連盟理事長とご一緒させていただく機会があり、そこから仏壮を結成できたことは本当に不思議なご縁」と松尾さん。そんな仏壮の会員たちが昨年からはめたのが紙芝居です。活動場所は千葉と東京の病院や高齢者施設数カ所、西原住職がビハーラ活動として行う法

話会の言わば「前座」をとめています。紙芝居を行う椎木俊郎さんは「最初はたどたどしかったのですが、何回か訪問していると『うまくなったね』と声をかけられ、とても励みになりました」と笑顔で語ります。毎月2カ所以上の訪問先があり、年間では30カ所ほどになります。同じ話を2回上演することはできませんので、常にレパートリーを増やしていかなければならず、準備もたいへんです。西井幸子さんは「毎回、30人ほど見に来られますが、『今日はよかった！』という一言がとてもうれしくて、うれしくて」と活動の喜びを語ります。西原住職は「施設や病院は宗教色がないほうが受け入れやすく、何よりも会員自身が楽しんで自主的に活動していることが素晴らしい」と語りました。

「西方寺仏教壮年会」が誕生したのは2011年、東日本大震災のボランティア活動がきっかけでした。初代会長の松尾俊彦さんは、震災直後から宗門の復興ボランティア活動に参加。一方、お寺では災害ボランティア基金を独自に設立して門信徒から浄財を募集。この基金は、活動者の経済的負担をなくすだけでなく、現地に赴けない門信徒も活動に協力できてありがたいと評判になりました。

話会の言わば「前座」をとめています。紙芝居を行う椎木俊郎さんは「最初はたどたどしかったのですが、何回か訪問していると『うまくなったね』と声をかけられ、とても励みになりました」と笑顔で語ります。毎月2カ所以上の訪問先があり、年間では30カ所ほどになります。同じ話を2回上演することはできませんので、常にレパートリーを増やしていかなければならず、準備もたいへんです。西井幸子さんは「毎回、30人ほど見に来られますが、『今日はよかった！』という一言がとてもうれしくて、うれしくて」と活動の喜びを語ります。西原住職は「施設や病院は宗教色がないほうが受け入れやすく、何よりも会員自身が楽しんで自主的に活動していることが素晴らしい」と語りました。



病院や施設を訪ね紙芝居を披露 (左から西井さん、椎木さん、松尾さん)

千葉・西方寺仏教壮年会

住職が法話  
仏壮は紙芝居  
「ビハーラ」で  
広がる活動

千葉県柏市にある西方寺の仏教壮年会(堂下俊宏会長)は、毎月、病院や高齢者施設を訪れて紙芝居を披露、患者や入居者からたいへん喜ばれています。西原祐治住職が30年近く行うビハーラ活動の法話会で何か協力できないかと、仏壮会員たちが活動を開始。「今では紙芝居のほうが好評(笑)」と住職も目を細めています。